

看護学生が陥りやすいコミュニケーションの躓き

キーワード：看護学生、コミュニケーション、躓き、看護学実習

○松園 彩香¹⁾、柄澤 清美²⁾

済生会新潟第二病院¹⁾ 新潟青陵大学²⁾

I 目的

現在の学生は、少子化、核家族化により人との関わりが少ないためコミュニケーション能力が低下していると指摘されている。先行研究¹⁾においても、看護学生が患者さんとのコミュニケーションに困惑していると明らかになっている。そこで本研究では看護学実習において学生がコミュニケーションに躓く要因とそのプロセスを明らかにすることを試みた。

II 方法

1. 研究対象

臨地実習を終了した看護学生4年生で、コミュニケーションが上手くいかなかった自覚をもつ5名。

2. 研究方法

個室で個別に半構成的面接を行い①コミュニケーションが上手くいかなかった場面の想起2場面、②その理由をどう自覚しているか、③コミュニケーションにおける交互性・伝達・解釈の達成度の自己評価について聞き取りをした。そして、得られた場面の交互性・伝達・解釈の達成度を「できていた」「部分的にできていた」「できていなかった」の3段階に評価した。

3. 倫理的配慮

対象者に、趣旨、参加および中断の自由、同意しない場合にも不利益を被らないこと、個人情報には明かされないこと、個人を識別できる情報は公にしないことを説明し同意を得た。

III 結果

得られた10場面において交互性は、「できていた」が2、「部分的にできていた」が8であった。伝達は、「できていた」が0、「部分的にできていた」が5、「できていなかった」が5だった。解釈は「できていた」が0、「部分的にできていた」が2、「できていなかった」が8だった。このように交互性、伝達、解釈の順に困難が増し、伝達はあるけれど交互性がない、または解釈はあるけれど伝達はないというような逆転現象は起きていなかった。

また、交互性・伝達・解釈、に対する研究者と学生の評価は、各々10場面、3場面、2場面に相違がみられた。評価の違いは、交互性については、言葉のキャッチボールの量に着目するか、やり取りされる言葉の相互作用に着目するかにあった。伝達については、伝達された言葉の有無に着目するか伝達すべきことの明確化に着目するかにあった。そして解釈について

は、「したつもり」か「されているか」の差であった。

IV 考察

結果の分析から、コミュニケーションを成立させるための交互性、伝達、解釈について検討した。まず、解釈が「したつもり」で留まるのは、自分の立ち位置を変えられないからであった。解釈は、相手の考え・感情のありようをその奥底まで理解しようと意識して、対象が表している言動から意識的に読み取ることであり、そのためには、相手に思いを寄せる意志や集中力とともに、感性の敏感さ、そして患者のおかれた状況において、どのようなニーズがありえるかに関する知見が蓄積されていることが必要であると考えられた。次に伝達の不十分さは、今伝え合うことや受け取るべきこと、注目すべき焦点のずれからきていた。患者の思いにセンサーが働くスタンスであることが必要であると考えられた。最後に交互性の不十分さは、解釈と伝達のずれによるものだった。伝達で「相手の思い」に焦点を当てることができ、解釈により、「この患者だからこそその思い」に近づくことができたうえでの交互性であってこそ意味ある交流になると考えられた。

看護学生が解釈・伝達・交互性に不足を生じることによりコミュニケーションに躓く実態の成因をみると、「情報収集をしたい」「会話を弾ませたい」などの「あるべき姿」とらわれた結果、自分の思いを押し付け患者の思いに注目できない傾向が読み取れた。また、自分には何もできないと決め付けることにより相手の思いに踏み込むことを躊躇する場合もみられた。

V 結論

1. コミュニケーションにおいて最も学生の困難度が高いのは解釈であり、次いで伝達、交互性である。
2. 形にとらわれずに対象理解を焦点としたコミュニケーションを目指すことがコミュニケーション改善に必要である。

引用文献

- 1) 井上香積・高田直子・新井龍ほか. 基礎看護学実習Ⅱで体験した看護学生の思い - 患者とのコミュニケーションを通して -. 滋賀医科大学看護学ジャーナル. 2008;6(1)46 - 49.